

デューラー研究 第21

デューラーの「絵画論」(7)

頭部の構成の試訳

美術学科

下村 耕史

Dürer's Drafts of his "On Painting" (7)

a translation by Koji SHIMOMURA

序

本稿は前6回の報告(第20巻, 1989年; 第22巻, 1991年; 第23巻, 1992年; 第24巻, 1993年; 第25巻, 1994年; 第26巻, 1995年)と同じく, *Dürer : Schriftlicher Nachlass*, herausgegeben von Hans Rupprich. Zweiter Band, Berlin 1966 を底本として試みられたデューラー未完の「絵画論」の草稿の訳である。凡例は前回に従う。

(承前) Nr. 2 「ウーバートラーク」による頭部の平面図の作成。(ロンドン草稿, 1512年頃, R. 2.283~285頁)

1

次に示す図法から, 顔の図の全ての部分が第二の図に, 更に第三の図に移される〔図1〕。

水平線 ab を引く。点 a から上に垂線を引き, 上の終点を cd とする〔図では c のみ記される〕。線 cb を引けば, a が直角である三角形ができる。その下に $defghjk$ と記した点で線 ab を区切り, それらの点から垂線を斜線 cb (原文では cd とあるが, あきらかに cb の誤記) に引けば, 線 cb は線 ab と相似的に区切られる。

線 cb 上の各点から垂線 ca に水平線を平行に引けば, ca は ab や cb と相似的に区切られる。

〔以下断片のため省略〕

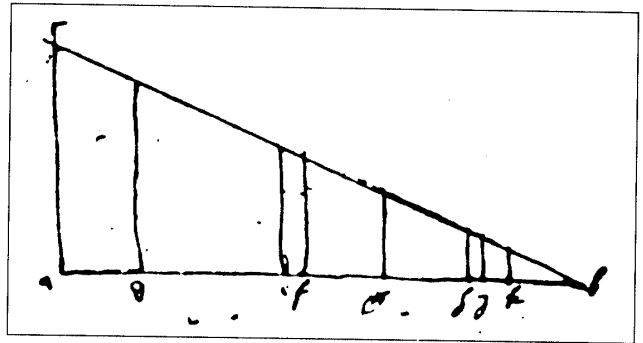


図1 ロンドン草稿 5231, fol. 89^a.

2

次に頭部の側面図から整然と引かれた全ての垂線を, 隅 z から引かれた水平線で貫く。この水平線は垂線 ab と交差するが, その線上に隅 34 をおけば, そこから頭部の側面図の下に方形 1234 が生じる。〔断片のため意味はやや不明〕

前に記されたフェアトラーク (vertragB) の図法による斜線による。それは次の頭部の図に実際に示される。その図はこの文の意味をもっと分かりやすくするであろう。〔同上〕

ある図から他の図へと転移するこの図法を一層よく理解するために, 次にある方法を提示し, それに名を与えよう。それにより一方から他方に〔図形が〕転移されるので, この図法をユーバートラーク (ver trager) と名付けることにする。

3

次の図法をウーバートラーク (vbertrag) と名付ける(図2)。これを教えてくれた人の名は言えないが〔意識〕, 本書で私はウーバートラーク (vbertrag) をつねに使用し, その名称を明示しなければならない。

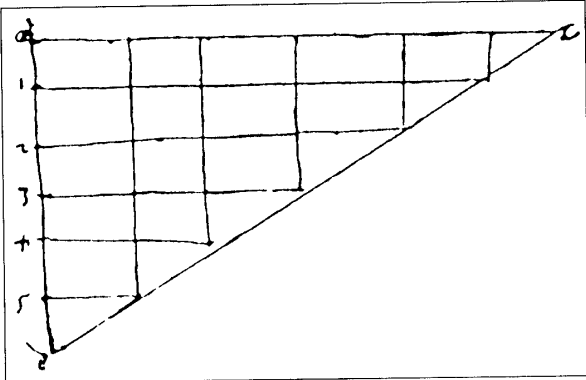


図2 ロンドン草稿 5230, fol.158^a.

4

・・・線 h a 上に〔線 g h 上の各点から水平に〕線が

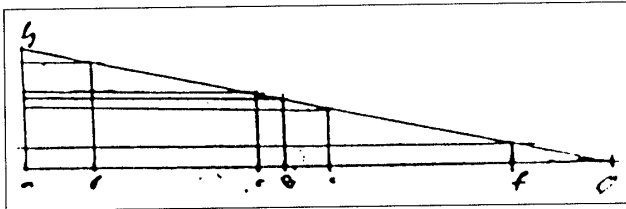


図3 ロンドン草稿 5228, fol.207^a.

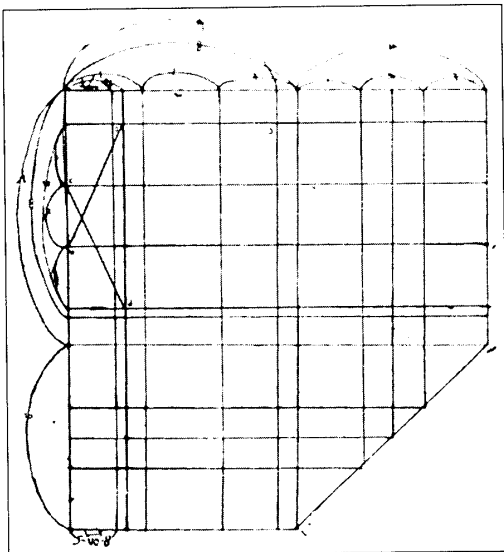


図4 ロンドン草稿 5228, fol.207^a.

引かれれば, 次図〔図3〕と後の顔の図にみるように, 線 h a は線 a g や線 g h と相似的に区切られる。

多くの事柄で次の図法が使用される〔図4。“würstüs”の意味は明瞭でないが, ここでは一応図法と訳した。〕。この図法で珍しいものが作られる。天文学者はそれで観察し, 数学者はそれで大地の長さや幅を測る。

5

二等辺直角三角形を作る。それを a b c とし, a b を水平, b c を直角とする。a から c に直線を引く。線 a b を点で区切り, それらを d e f g h i とする。それらの点から下に線 a c まで垂線を引きおろせば, 線 a c は線 a b と相似的に区切られる。a c は斜線で, ラテン語で対角線“diame-ter”と言われる。垂線は“perpenticulares”である。それらの線はつねに相互に並行して引かれるので, 平行線 (barallela) をなす。

〔垂〕線 d e f g h i と線 a c との各交点から水平線を線 b c まで引けば, 線 b c は線 a c と相似的に区切られる。この図法により側面図と正面図から別の図面に〔ある図形が〕移される。これにより顔の平面図が得られる。

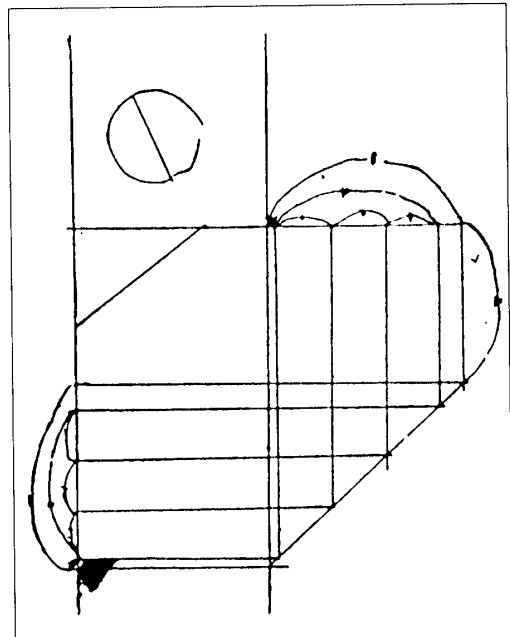


図5 ロンドン草稿 5231, fol.22^a.

Nr. 3 平行投影による3頭部図。顎を(身長)の $1/20$ の長さだけ上にずらすこと。(ロンドン草稿, 1508年頃, R. 2. 286頁) [図5]

顎を方形の下から $1/20$ だけ上に上げる。

Nr. 4 平行投影による3頭部図等。ユークリッドによる平行線, 垂線, 水平線, 直径, 直角の定義。「フェアトラーク」。(1~2はロンドン草稿, 3はニュルンベルク草稿, 1512年頃, R. 2. 286~290頁)

1

頭部の線は方形の中にきれいに描かれる。そのことから, あるものを一方から他方に移すことのできる方法に注目しなさい。いずれの方向にも, 上下にも水平にも, また両側にも, 斜め方向にも移すことができる。それを平行投影によってなさなければならない。この線を以後平行線 (barlinj) と呼ぶことにする。それらの線は曲がっていても真っすぐでも, つねに等間隔である。それらの線が永遠に引かれるにしても, その間隔は広くも狭くもならない。

垂線 (perpenticulares) を以後“awffrechtlinj”と呼ぶことにする。

対角線 (diameter) を“ortstrich”と呼ぶことにする。それは直方形内で一方の角から他方の角に引かれる斜線で, 直方形内で最長の線である。

直角というとき, 鈍角でも鋭角でもない角のことをいうのであり, ユークリッドが直角, 鈍角, 鋭角という三種の角を定めたのと同じ意味でいう。・・・[第一巻, 説明10, 11, 12]

そのことをいうのは, 頭部を素描するのに, 3つの方形が必要であるからである。1つは側面図のためであり, それに頭部の側面図が描かれる。次ぎは顔の正面図, 第3は頭部の平面図のためである。

側面図には左右2つの観面がある。顔の正面図の輪郭線は頭部の背面図の輪郭線と同じである。こうして2つの方形は4つの観面を示す。

それを理解するために, 次のようにする。

直角の方形 a b c d を描く。それに記号なり点

を記す。その中の任意の位置に5点ほど定め, それらを1 2 3 4 5とする。

それらの点を通る5本の平行垂線を引く。またこれらの5点を通る平行水平線を引けば, 平行線は相互に十字状に交差して, 各々直角を結ぶ。これらの結び目の中に〔頭部の諸部分が〕描かれる・・・

いま描かれた方形の横に, 平行な2本の垂線1 2を, 任意の幅で引く。最初の方形 a b c d の上下2本の水平線と平行な2本の垂線1 2と交差させれば, それにより直方形1 2 3 4が結ばれる。

[以下断片のため省略]

2

あるものを方形の中にきれいに描くことができる。そこで方形を描いてその中にあるものを描き, それを第二, 第三の方形に, 上下, 水平, 両側のいずれの方向にも, 直線で移すことができることを示そう。

それで斜線と平行線によってあるものを移す方法を定め示そう。そしてそのための線がどのように呼ばれるかに, まず注目することである。

最初に平行な線を平行線 (parlinj) と呼ぶ。それはつねに同じ間隔ですすむ線である。それでそれらの線は曲がっていても真っすぐでも, 等間隔である。

垂線 (perpenticulares) を“awffrecht linj”と呼ぶ。そこで水平線が垂線と交差すれば, 直角が生じる。

対角線 (diameter) を“ort strich”と呼ぶ。この対角線は方形の中で, 一方の角から他方の角に引かれる最長の線である。

直角というとき, 鈍角でも鋭角でもない角のことをいうことに注目しなさい。ユークリッドは直角, 鈍角, 鋭角に分けた。これ以外の角はない。

そのことをよく理解するために, 次のようにする。直角の方形を描く。2つの垂辺を a b, 2つの水平な辺を c d とする。方形の中に必要なだけの平行な垂線と水平線を引く。

3本の垂線を定め, それを1 2 3とする。次に4本の平行な水平線を引き, それを4 5 6 7とする。方形 a b c d から平行な垂線を上にも下にも

引くことができる。同様に平行な水平線 4 5 6 7 を左右両側に引くこともできる。

これらの線が引かれると、2本の平行な水平線 c d と平行な水平線 4 5 6 7 を〔左右〕任意の側に延ばすことができる。〔左右〕任意の側の c d 間に、任意の幅で2本の平行な垂線を引けば、方形 e f g h が生じる。その方形は方形 a b c d と同様、平行線 4 5 6 7 で区切られる。次に2本の平行な垂線 8 9 を方形 e f g h に通す。その2本の線を必要なだけ上にも下にも延ばすことができる。

この2つの方形をその内部の線とともに平面図に移そうと思えば、〔垂線〕 a b 〔から下ろされた線〕と2つの方形から下ろされたすべての線に、水平線 l m を通しなさい。

次に方形 e f g h の下に、〔垂線〕 f 〔から下ろされた線〕と l の交点から垂線 e まで対角線を引けば、三角形 l n o が生じる。o は直角である。そして2辺 l o と o n は同じ長さである。4本の垂線 e f と 8 9 〔から下ろされた線〕が対角線 l n に接するその交点から、l m に平行に水平線を引いて、それらの線を平行な垂線 a b 1 2 3 〔から下ろされた線〕に通せば、平面図がそこから結ばれる〔テキストでは a h であるが、h は明らかに b の誤記であるので、b とした〕。その方形を m p q r とする。それらの結ばれた線は、各部がどの位置にくるかを、すべて示す。このように線は一方から他方に移す。それでこの図法をフェアトラーク (vertrag) と呼ぶことにしよう。

方形の中にあるものが描かれていれば、平行線はそれを他の方形に移す。その方形はそれを垂線によって対角線に移す。対角線から水平線が引かれれば、〔第三の方形内の〕交差し合う線が、各部のあるべき位置を、すべてのものについて示す。

それ故このフェアトラークは、頭部と人体像全体〔を描くの〕に役立つであろう。それで頭部を方形の中に描いて、そのすべての部分〔の位置〕を垂線と水平線で示し、フェアトラークによって一方から他方に移そう。

3

ある図形を方形の中にきれいに描くことができる。それで方形を描き、その中にある図形を描いてそれを、第二と第三の方形に直線によって、上下、水平、両側のいずれの方向にも移す方法を示そう。

対角線によってある図形を移して、平行線でもう一度それを移す仕方を教えよう。

それに必要なすべての線の呼び方にまず注目しなさい。

最初に平行な線を平行線 (parlinj) と呼ぶ。その線はつねに等間隔ですすむ線である。曲がって引かれても真っすぐでも、その間隔は狭くも広くもならない。

垂線 (perpendiculares) を“awffrecht linj”と呼ぶ。垂線と交差する水平線は直角をなす。また対角線 (dyiameter) を“ortstrich”と呼ぶ。それは角から角に引かれる方形の中の最長の線である。

直角というとき、鈍角でも鋭角でもない角のことをいうことに注目しなさい。ユークリッドは直角、鈍角、鋭角に分けた。これ以外の角はない。

そこで次のようにする。

直角の方形を描き、2本の垂辺を a b とし、2本の水平の辺を c d とする。その中に必要なだけの垂線なり水平線を引くことができる。3本の平行な垂線を定め、それを 1 2 3 とする。次に4本の平行な水平線を引き、それを 4 5 6 7 とする。方形 a b c d から平行な垂線 1 2 3 を上にも下にも延ばすことができる。同様に平行な水平線 4 5 6 7 も左右両側に延ばすことができる。

これらの線を引いたのち、2本の平行な水平線 c d と平行な水平線 4 5 6 7 を〔左右〕任意の側に延ばす。〔左右任意の側の〕c d 間に任意の幅で2本の垂線を引けば、方形 e f g h が結ばれる。この方形は、方形 a b c d と同様に、平行な水平線 4 5 6 7 に区切られる。次に2本の平行な垂線 8 9 を方形 e f g h に通す。この2線は必要なだけ上にも下にも延ばされる。

この2方形をその内部の線とともに平面図に移

そうと思えば、2 方形から下に引かれたすべての線に〔c d〕平行な水平線 l m を通す。

次に〔垂線〕 f〔から下ろされた線〕と l の交点から垂線 e まで対角線を引けば、三角形 l n o が生じる。o は直角である。また2 辺 l o と o n は同じ長さである。

4 本の垂線 e f と 8 9〔から下ろされた線〕が対角線 l n に接するその交点から、〔l m〕平行な水平線を引いて、それらの線を平行な垂線 a b 1 2 3〔から下ろされた線〕に通せば、方形の平面図 m p q r がそこから結ばれる。それらの結ばれた線は、最初の2 方形の各部がどの位置にくるかを、すべて示す。このように線は一方から他方に移す。

それでこの図法をフェアトラーク (fertrag) と呼ぶことにしよう。方形の中にあるものが描かれていれば、平行線がそれを他の方形に移す。その方形はそれを垂線によって対角線に移す。対角線から水平線が引かれれば、〔第三の方形内の〕交差し合う線が、各部のあるべき位置を、すべてのものについて示す。

それ故このフェアトラークは、頭部〔を描くの〕に役立つであろう。人体像全体についても同様である。

それで頭部を方形の中に描いて、そのすべての部分〔の位置〕を平行な垂線と水平線で示し、フェアトラークによって一方から他方に移そう。

この図法はフェアトラーク (fertrag) と呼ばれる。

Nr. 5 測定と顔の造形についての2つの覚書。

(ロンドン草稿, 1513/15年, R. 2.290頁)

まだ述べられていないことについても、その方法で測定し、正しく見いだすことができる。

顔の形を描くのは、甚だ誤りやすい。それで目分量で〔測っても〕おおまかになるので、顔の線については非常に慎重に引くように努めなければならない。

2. 男性の頭部

Nr. 1 頭部の側面図の構成。(ロンドン草稿, 1512/13年, R. 2.291頁)

方形について述べる。

頭部の側面図を、諸部分のすべての奥行きに接してそれらを示す垂線で区切り、それらの線に文字を記す。方形を囲む線から記述を始める。

方形の前の線を a, 後ろの線を b とする。a から1/9後ろに c をおく。その線は、頸部に達する前に、後頭部特有の窪みに接する。

b から1/9前に d をおく。その線は額の旋毛, 下唇, 顎下に接する。

d から1/11後ろに e をおく。その線は頸部の後ろに接する。

e から1/16前に f をおく。その線は頸部の前に接する。

a から1/11後ろに g をおく。その線は耳の下端に接する。

a から1/14後ろに h をおく。その線は頬と耳の前に接する。

e から1/12前に j をおく。その線は下唇と顎との間の窪みの奥に接する。

j から1/10後ろに k をおく。その線は後頭部のつむじに接する。

h の前に l をおく。その線は眉毛の端に接する。

d j 間に m をおく。その線は眼球の前と鼻翼の後ろに接する。

次に〔頭部の〕諸部分のすべての高さを水平線で区切る。それに文字を記す。上辺の水平線を a, 下のそれを b とする。

a から1/32下に c をおく。その線は後頭部のつむじと額の旋毛の前に接する。

c から1/11下に d をおく。顎先はその線上にある。

a から1/16下に e をおく。その線は頭部の眉毛に接する。

e d 間の中央に f をおく。その線は鼻下と垂線 c 上の後頭部の窪みに接する。

2 線 d c の交点から、a b が出会う前下の点まで直線を引く。〔垂線 d と水平線 c の交点から垂線 a と水平線 b の交点までの直線の意か、この文やや意味不明〕

Nr. 2 頭部の正面図と背面図の構成。(ロンドン草

稿, 1512/13年, R.2.291~292頁)

方形の2本の垂辺をa bとする。その間を3垂線で4等分する。それらの線をc d eとする。c e間を2線で3等分する。それらの線を〔線dを挟んで〕h jとする。次にa c間を2点で3等分する。e b間についても同様にする。〔垂辺〕aとbのすぐ横の点からそれぞれ〔垂〕線を引き、顔の線をそれらの線の内側に引き入れる。頭頂部は〔水平〕線xに〔垂〕線d上で接するようになる。頭部の線はそこから水平線j上の2線a bまでそれぞれ円弧状に下りる。頭部の線はそこから耳上の〔水平〕線kまで円弧状に下りる。そこではa f間とg b間のそれぞれの半ばまで〔頭部の〕線を引き入れる。

耳はk l間の、a fとg b間にある。2つの耳朶はa f間とg b間の頬よりの半分にはいる。頬の線を線fとgから〔水平〕線z上の顎まで円弧状に下げる。そこでの頸部の幅は1/16である。顎の線を垂線h j間に引き、両側でそれをこえてその上の〔水平〕線oに接するようになる。口の線をh j間にそれにふさわしい形で描く。

鼻の線を2垂線h j間と〔水平線〕k l間に描いて、鼻翼をh jに接するようになる。鼻の幅はh j間の半分である。

両眼は〔垂線〕c hとj e間にある。眉毛の線を水平線j上に描き、両側のf c間とe g間の中央までその線を引く。次に額と髪際の線を他のものとともに正しく引き入れる。

額の露出部の線を両側の〔垂〕線f gまで描く。

頭部の背面図をいま作成された2つの頭部から方形の中に描く。

次図にみるように、それを描く。〔現在は切断された紙葉の素描を指すルップリッヒの註による〕

顔の形態をいま引かれた線の周囲にみることになる。

Nr. 3 頭部の平面図の作成。男性の頭部平面図。同じ方法は人体像全体に適用される。(ロンドン草稿, 1512年頃, R.2.292~294頁)

1

顔〔の側面〕のすべての部分の奥行きを示すために、この〔平面図の〕方形1 2 3 4に頭部の側面図の垂線を通して、鼻、口、顎、眼、耳、頭部、額、頸部の始めと終わりを示したが、顔のすべての部分の幅を示すことも更に必要である。それを次のようにする。

頭部の正面図のすべての垂線a i g c d e f h k bを対角線y zまで下ろしてその線と交差させ、対角線y z上のそれらの交点から平行な水平線を引いて、それらの線を方形1 2 3 4に通す。こうすれば平面図の部分のすべての幅が区切られる。こうしてこの方形は賽の目状に分けられる。次に顔のどの部分がどの線に接しているかを上の2つの頭部からよく見てそれに従って、次図に実際にみるように、頭部の形態を方形に描き入れる。〔その素描は遺っていないとみられるルップリッヒの註による〕

2

次にいま描かれた平面図の方形内の頭部を側面図の方形の下におき、〔側面図の〕すべての垂線を下ろせば、顔の側面図と正面図の2つの方形と前記の三角形の対角線によって、〔平面図が〕結ばれる。その対角線によって顔の正面図の垂線が屈折されて、水平線として平面図に移されるからである。…こうしてそれらの交点から平面図に顔の諸部分のすべての幅、長さ、奥行きが与えられる〔欠語があり、意識した〕。

〔次の文節も上記と内容は同じである〕次にいま描かれた頭部の平面図に、側面図からそのすべての垂線を下ろす。顔の正面図からも同様にする。正面図の平行な垂線が対角線上で前記の三角形によって屈折され水平線として移され、それらの線が側面図から下ろされていた垂線と交差して、それらの交点から顔のすべての部分の長さ、奥行き、幅が与えられる。

次図にみるように、形態の線をそれに引き入れる。文字による記述より図の方が分かりやすい。

以上のことをよく学び、理解し、繰り返し練習すべきである。一度読むだけでは理解できないからである。

このように〔人のみ〕すべてのものを平面図にしなければならない。それが仕事上、〔対象を画面に〕投影するために必要になるであろう。

3

次に顔の側面図と正面図の2つから、対角線によって平面図に線を引けば、線が結ばれて、〔それらの交点から〕すべての幅、奥行き、長さが示される〔意識〕。

Nr. 4 男性頭部の側面・正面・背面・平面図。(1 ドレスデンのスケッチ帳から、2~4 ロンドン草稿〔図のみ〕、1は1512/13年、他は1513/15年、R.2.294~295頁)

頭部の側面図を細くしようと思えば、g l間の幅を取り去って、g lを一線にすれば、耳は眼にもっと近くなる〔図6参照〕。頬の線をもっと前に描く。頸部の厚さを〔縮めて〕顎に近よせる。頭部の上部を更にきちんと縮める。その他の部分をそのままにすれば、頭部〔の大きさ〕は変更される。

頭部の正面図の幅を広げようと思えば、耳上を広げ、額の旋毛の線上の幅を〔身長〕1/10にする。その他の部分はそのままにする。この紙葉の裏面には、交差し合う線の周りに透写して描かれた頭部がみられる。〔図7~9参照〕

Nr. 5 男性頭部の側面・正面・背面図の構成と「ユーバートラーク」による平面図の構成。(ロンドン草稿、1515の年記、R.2.295~299頁)

前に人体像について記述し素描したので、ここでは男性の頭部をとりあげ、前よりも詳細に記述しよう。

まず〔身長〕1/8の高さの方形を並立させる。最初の方形の幅を1/8とする。それに頭部の側面図を描く。他の2つの方形の幅を1/10とし、その1つに頭部の正面図を、他に頭部の背面図を描く。

3つの方形をきれいに並立させて、その3つを〔上下〕2本の水平線で結ぶ。上の水平線を j, 下

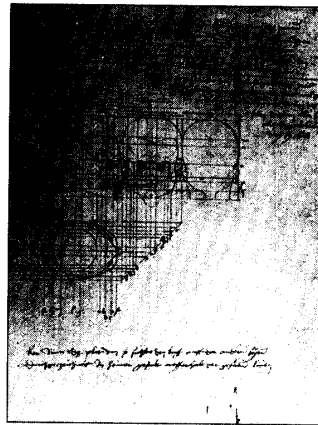


図6 ドレスデンのスケッチ帳, fol. 93r.
Strauss 113.

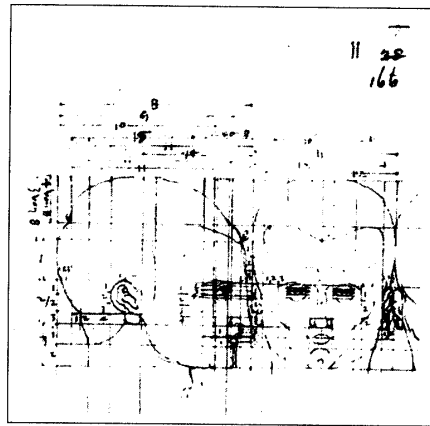


図7 ロンドン草稿 5230, fol. 166^a.

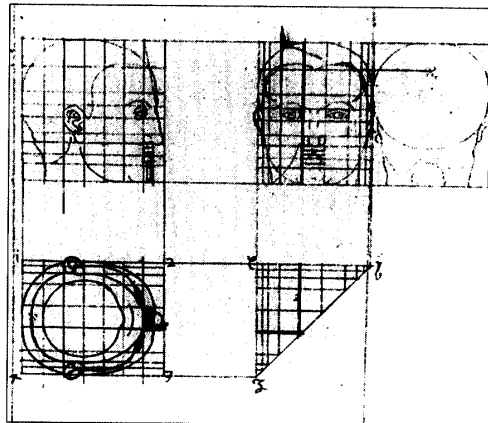


図8 ロンドン草稿 5230, fol. 169^a.

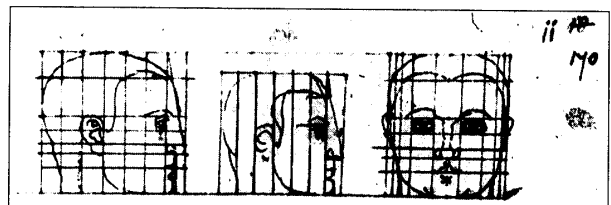


図9 ロンドン草稿 5230, fol. 170^a.

のそれをnとする。

次に顔の側面図の最初の方形を取り上げ、〔左右〕2本の垂線のうち、鼻の出ている前の垂線をa、頭部の後ろのそれをbとする。

次に顔のすべての部分の高さと低さに平行な水平線を次のように通す。

nから1/10上に線kをおく。この線は前の髪際を額の露出部から分ける。後頭部のつむじはk l間の1/3にある。

次にk n間を2線l mで3等分する。上の線lは眉毛を通り、耳上に接する。線mは鼻と耳朶の下に接する。

次にk l間を2点で3等分する。最下部を線oで区切る。この線は眉毛の上の額の切れ込みを通る。

l m間を2点で3等分する。上1/3を線pで区切る。2線l p間に眼がはいる。眼の両縁は前後ともl p間の中央にある。

l m間を3点で4等分する。下の1/4を線qで区切る。この線は鼻翼の上に接する。耳朶はつねにq m間にはいる。

m n間を線sで2等分する。この線は顎上に接する。また顎は線nにも接する。

m s間を線rで2等分する。この線は口の中央を通る。

r s間の上半分に下唇がはいる。その下半分に唇と顎の間の窪みがはいる。

m r間を2点で3等分する〔テキストでは3点とあるが、以下の文から明らかに2点なので、2点とした〕。下の1/3には上唇がはいる。上の2/3には鼻下のみぞがはいる。

以上これらの線で、頭部の主要部分の高低が示された。

更に頭部の諸部分の奥行きを垂線で区切る。

鼻が出ている前から後ろへと奥行きを区切る。

まずa b間を6本の垂線c d e f g hで7等分する。最初の線cは眼球の前、鼻翼の後部、口端に接する。

水平線jと垂線cの交点から垂線aと水平線mの交点まで斜線を引く。〔後者の〕交点をtとする。

この斜線c tと水平線kの交点に、額の髪際の旋毛がある。またこの斜線は、額と鼻の位置を示す。

2本の垂線a c間の中央に平行な垂線vを、2本の水平線m n間で引く。この線は口の上唇の前に接する。

2本の水平線r c間で、〔垂線〕v c間を2本の垂線で3等分する。前の線は下唇と顎の前に接する。後ろの線は、下唇と顎の間の窪みの奥に接する。

次に目尻を垂線c d間の中央と〔水平線〕l p間の中央の交差する処に描く。このl p間で垂線dは眉毛の後ろに接する。眉毛は前で僅かに水平線lの下になる。

垂線f g間と水平線l m間の交差する処に、耳全体の高さとはいる。耳朶は2本の水平線q m間の、〔垂線〕fよりの半分にはいる。頭頂部は垂線fで水平線jに接し、後頭部は水平線o l間で垂線bに接する。後頭部と頸部は垂線hと水平線mの交点で接する。後頭部のつむじは〔垂線〕h b間の中央に描かれる。後頭部下から顎までの頸部の厚さは、1/14である。

こうして頭部側面の形態の線を、人間らしい形で非常に慎重に、以上の線に描き入れる。

この後ようやく頭部の正面図にとりかかる。

頭部は垂線fから額の旋毛まで円弧状に下がる。額はそこから斜線c tの上に僅かにでて、水平線o上で斜線にまた接する。

眼の上の膨らみが、〔水平線〕o l間で斜線c tの上にする。

眼の上の膨らみの形態線はその下部が、線lの下で斜線の下になる。そこから鼻は始まる。この斜線c tの下に鼻全体の形を描き、長い鼻の先が水平線mに触れるようにする。鼻孔の線をそこから後ろに上がるように描く。

次に鼻翼の線を〔水平線〕q mの間に、その上下が接するように描く。そして鼻翼の後ろが垂線cに接するようにする。

口、唇、顎の線をどのように描くかを、細かく引かれた直線が示すが、それについて記すことは長くなるであろう。

眼の形態の線を前記の〔交差してできる小さな〕方

形に描き入れる。眉毛についても同様にする。

次に額の露出部の線を描く。その下端は垂線 e f 間の中央にある。そこでの髪の毛の生え際は水平線 q 上にある。

耳の形態の線を、〔垂線〕 f g と〔水平線〕 l m の交差してできる方形内の、前に直線で示された処に、できるだけ円く描き入れる。

次に頬の線を、耳の後ろから頸部を通して顎まで、円弧状に描く。

頭部の線を垂線 f の上から始めて、〔水平線〕 j k 間の下1/3の処の、〔垂線〕 h b 間の中央の後頭部のつむじまで、円弧状に下ろす。そこから頭部の線を、垂線 b と水平線 o の交点まで、後方に円弧状に引き下ろす。そこから頭部の線を、垂線 h 上の水平線 m まで、円弧状に引き下ろす。そこから頸部の線を、後ろ下に張り出しながらか引く。頸部の厚さは前述の通りである。このようにして〔頭部の〕各部分を、前述の方形の中の、各々のあるべき位置に描く。

頭部の側面図を極めて簡潔ではあるが描いたので、更に頭部の正面図を第二の方形に描こう。それを次のようにする。

最初に頭部の正面図のすべての水平線を、第二の方形に〔側面図から〕ユーバートラーク〔übertrag〕によって引き入れる。それらの線は顔の正面図のすべての部分の高低を示す。

そのことをなしたら、正面図の方形に平行な垂線を引く。それらの線は顔のすべての部分の幅を示す。

頭部の正面図の方形の、2つの垂辺を a b とする。

a b 間を平行な4本の垂線 c d e f で5等分する。中央部分に頭頂部、鼻、口、顎が描かれ、2つの鼻翼は2本の垂線 d e に接する。鼻の幅は〔垂線〕 d e 間の半分である。口の両隅はこの2本の垂線 d e を僅かにこえる。顎の幅もその奥のほうではこの2線をかなりこえる。両方の目頭も2本の垂線 d e に接する。両方の目尻は他の2本の垂線 c f に接する。

次に垂線 a c 間と f b 間をそれぞれ2本の垂線

g と h で2等分する。

この2線 g h はそれぞれの側で、水平線 k との交点の〔かなり〕下方で、頬骨に接する。眉毛の端は、垂線 g c 間と f h 間のそれぞれの中央と、水平線 l p 間の中央の交差部にある。

〔垂線〕 a g 間と h b 間をそれぞれ2本の垂線 j k で2等分する。

垂線 a j 間と h b 間に耳がはいり、耳朶は顔よりの半分にはいる。顔の幅は〔垂線〕 j k 間である。頸部の幅は顎下で1/14である。額の幅はそれぞれの側で2本の垂線 g h に接する。

こうして垂線と水平線が交差すれば、顔〔の諸部分〕の幅と高低が示される。その後顔の正面の形態の線をこの方形に描き入れ、頭頂部が〔垂線〕 d e 間で水平線 j に接するようにする。そこから頭部の線を、2本の垂線 a b と水平線 o の交点まで、それぞれ円弧状に描く。そこから頭部の線を、垂線 a j 間と k b 間の中央の、水平線 l までそれぞれ引き下ろす。

次に額の旋毛を垂線 d e 間の中央の、水平線 k 上に描く。額の露出部は両側で2本の垂線 j k まで広がる。

〔顔の〕両側で水平線 m から、2本の垂線 g h と水平線 s の交点まで〔頭部の線を〕引き下ろし、更にその線を顎まで完全に引き入れる。

次に口、鼻、眼、耳の線をこのようにして規定された〔小〕方形に描き入れる。

その他多くの必要な線を描き入れなければならないが、簡潔にするため省略する。

頭部の正面図を描いたので、頭部の背面図を第三の方形に、これまで描かれた2つの頭部から描く。頭部の正面図の輪郭線はそのまま頭部の背面図のそれになる。それでそれについて説明することはあまりない。ただ頭部を頭部らしく円形に、頸部の形をそれらしく、またつむじをその位置にきちんとおくことである。首筋の線をよい形に描いたら、主要部分を終えたことになる。

次に話をすすめる。平面図を頭部の側面図と正面図の方形から描くことにする。まず側面図からそのすべての平行な垂線 a c d e f g h b を、必

要なだけ真っすぐ下ろす。

顔の正面図の第二の方形から、そのすべての平行な垂線 $a j g c d e f h k b$ を下ろす。

頭部の2つの方形の下にそれと平行な直線を水平に引いて、頭部の側面図と正面図の両方の方形から下ろされたすべての垂線を通す〔テキストではすべての水平線とあるが、ここでは明らかに垂線の誤記であるので垂線とした〕。この水平線と頭部の側面図の垂線 b の交点を、1とする。またこの水平線と〔側面図の〕前の垂線 a の交点を、2とする。更にこの水平線と顔の正面図の垂辺 $a b$ から下ろされた線の交点を、 $x y$ とする。

次に角 y から、前に引かれた線 $a x$ 〔から下に延ばされた線〕に対角線を引く。先端の角を z とする。三角形 $x y z$ ができる。 x は直角である。また $x y$ と $x z$ は同じ長さである。

点 z から、前に引かれた頭部の側面図の垂線 b 〔から下に延ばされた線〕に〔線1 2と $x y$ に〕平行な水平線を引く。その交点を4とする。この水平線と側面図の方形の垂線 a 〔から下に延ばされた線〕の交点を、3とする。こうして頭部の側面図の方形の下に、方形1 2 3 4ができる。

2辺1 2と3 4の幅は1/8である〔テキストでは2辺1 2と4 5とあるが、5はあきらかに3の誤記であるので、3とした〕。また1 4と2 3の高さは1/10である。

この方形に平面図が描かれる。〔前に側面図から下ろされた〕垂線が、頭部の側面図と同じ仕方で、この平面図のすべての部分を区切る。それでこれらの垂線は、頭部の側面図と同じ仕方ですべての部分に接し、すべての部分の奥行きを示す。即ち、額、鼻、眼、口、顎、耳が、頭部の側面図同様、どこで始まり終わるのかが示される。

この後顔の正面図の幅をそれに描き込む。

三角形の対角線 $y z$ まで下ろされた頭部の正面図のすべての垂線と対角線のそれぞれの交点から、平行な水平線を引いて方形1 2 3 4に通す。こうすれば平面図は小さな賽の目にみだされて、顔のすべての幅は区切られることになる。各々の〔小〕方形が各部分を含むのである。それで頭部の側面図と正面図から、顔のどの部分もそれぞれの垂線

と水平線に接するように、〔垂線と水平線を〕引きなさい。

こうした後に顔の平面図の形態をそれに描き入れなければならない。次図に部分的にみるように〔図10参照〕、耳、眼、鼻、口、顎、額、頬、頭部、頸部その他すべての部分が、どの方形にはいるかに注意しながら、これをなさなければならない。

この三角形 $x y z$ を以後特別の図法としよう。他の事柄にもそれは使用できるからである。それによって一方が他方に、あるいは他方を経て〔第三のものに〕移される。それでそれをこれからユーバートラーク (Übertrag, 転移法の意) と呼ぶことにする。

このユーバートラーク (Übertrag) には必ず直角がある。線がどのように区切られていようと、その区切りを平行線で他の辺に移すことができる。同様にそれを、その辺から更に〔他の辺に〕移すことができる。このユーバートラークを様々に作り変えて、それで多くのことを実現することができる。

以後、「ユーバートラークでそれを描きなさい」というだけで、そのことの意味が分かるように、それを図に描いて簡潔に示すことにしよう。

最初に任意の長さの三角形 $x y z$ を描く。その任意の1辺をとる。いま $x z$ をとり、それに点1 2 3を記す。 $x z$ 上のそれらの点から対角線 $y z$ に平行な水平線を引けば、対角線 $y z$ は線 $x z$ と同様に区切られる。

対角線 $y z$ 上のこれらの交点から、平行な垂線を上に引いて線 $x y$ を通せば、 $x y$ は $x z$ や $z y$ と同様に区切られる。こうしてこのユーバートラークについては十分理解されるように記された。

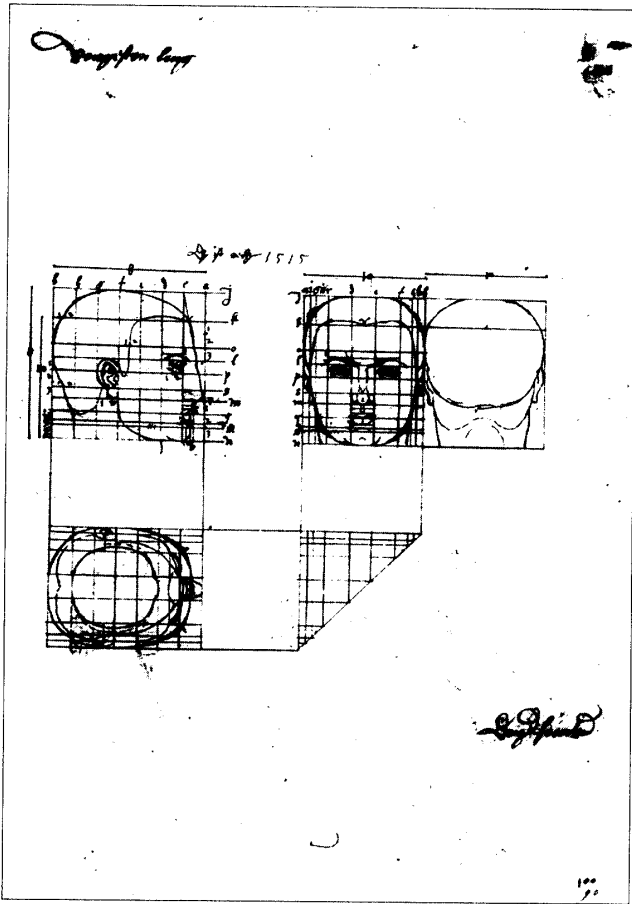


図10 ロンドン草稿 5228, fol. 185^a.

挿 図 一 覧

- 図1 ロンドン草稿 5231, fol. 89^a.
- 図2 ロンドン草稿 5230, fol. 158^a.
- 図3 ロンドン草稿 5228, fol. 207^a.
- 図4 ロンドン草稿 5228, fol. 207^a.
- 図5 ロンドン草稿 5231, fol. 22^a.
- 図6 ドレスデンのスケッチ帳, fol. 93r. Strauss 113.
- 図7 ロンドン草稿 5230, fol. 166^a.
- 図8 ロンドン草稿 5230, fol. 169^a.
- 図9 ロンドン草稿 5230, fol. 170^a.
- 図10 ロンドン草稿 5228, fol. 185^a.

挿図説明の Strauss は、W. L. Strauss: *The Complete 'Dresden Sketchbook'*, New York 1972. の略称である。また「ロンドン草稿」は、大英博物館所蔵のデューラー草稿を指す。